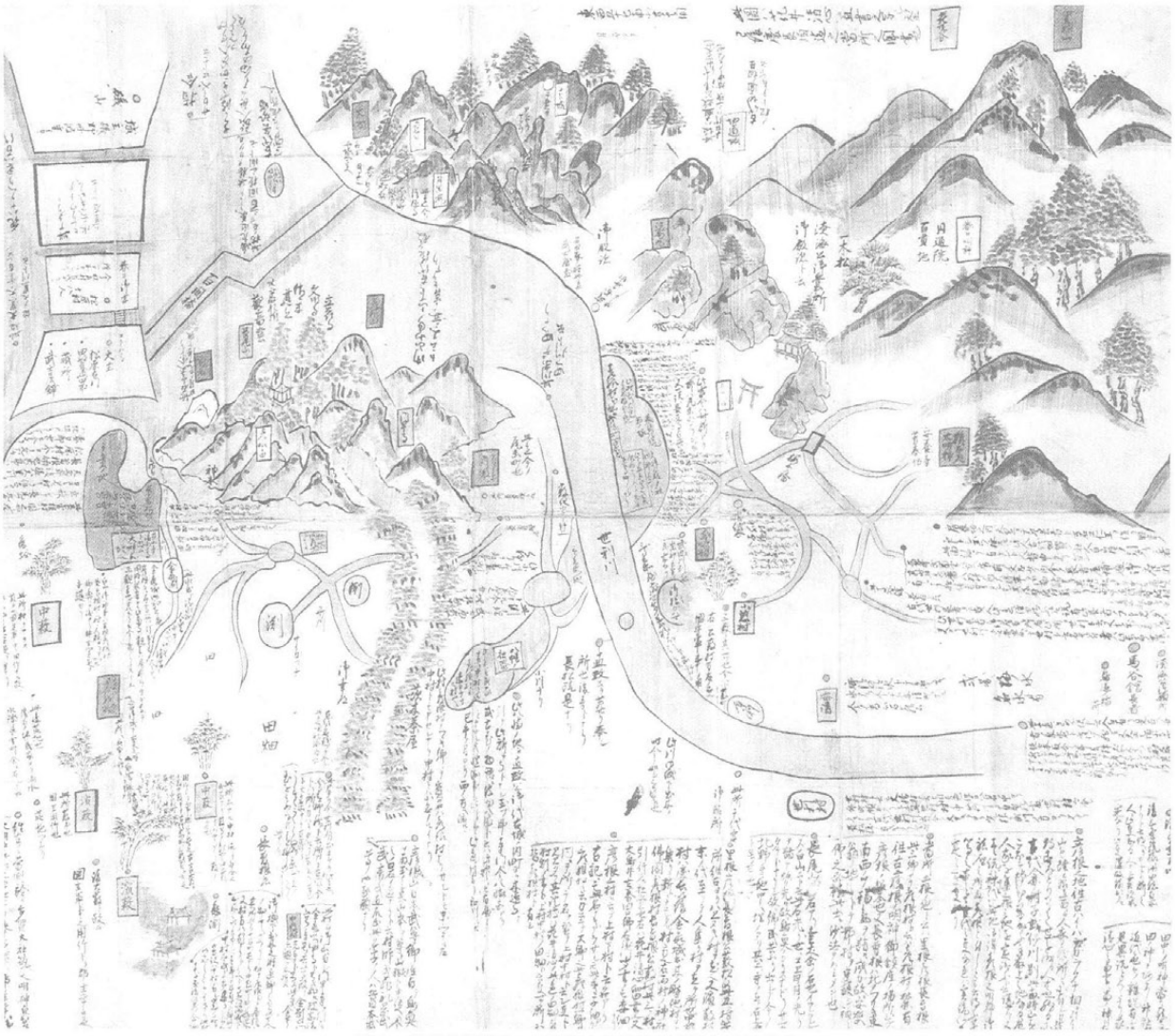
Ⅰ. 歴 史 的 環 境

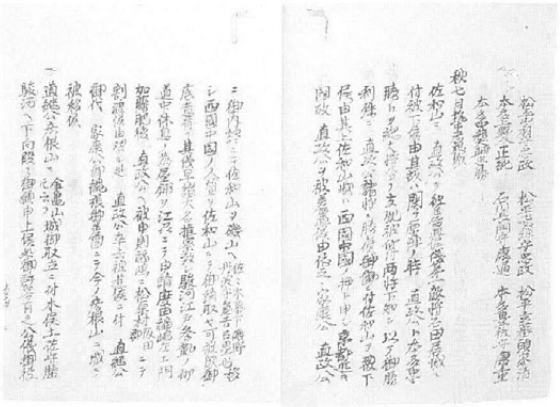
彦根城築城前

表御殿跡は、彦根城天守がそびえる彦根山（城山）の東のふもとに位置している。この彦根山は、磯山・大堀山・野田山などの周辺の山々と同様、秩父古成層からなる。古くは鈴鹿山地に連続し、その後長く湖中の島であったが、やがて芹川の沖積作用などによってしだいに周辺部が埋まり、彦根城築城前夜には、北東側一帯にいまだ内湖（松原内湖）を残していたものの、他域はおおよそ陸化していたようである。この当時、つまり彦根城築城以前の当地の景観を伝える貴重な資料として、『彦根古図』（写真１参照）と称される絵図がある。この絵図は、江戸時代初期、彦根藩初代藩主井伊直政の家臣であった花居清心という人物によって描かれたものという。ただ、残念ながら当初のものは残っておらず、後世の写しが数点伝わっている。写しは、それぞれ若干の加筆・省略等があって必ずしも同じではないが、大きな差異があるわけではなく、当時の景観を復元する上で、有力な手がかりとなるものである。それによると、陸化した地には所々に渕や藪を残しながらも水田が広がり、幾つかの集落が点在している。江戸時代の伝承記録などによれば、古くから里根・彦根・長曽根を「三つ根」の地と言い、築



写１　彦根古図部分　（滋賀大学経済学部附属史料館蔵）

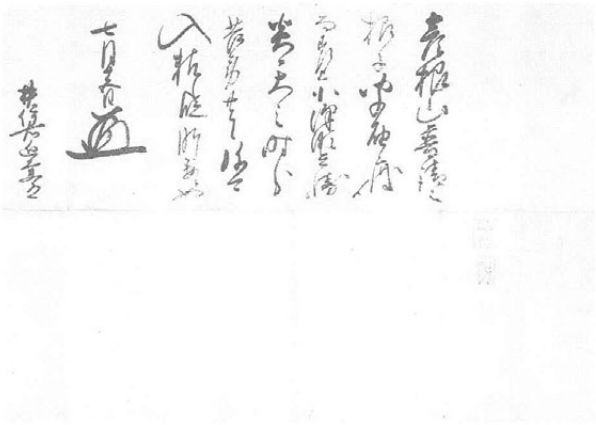
城前の当地における有力郷村であったと伝えている。絵図中には彦根村、長曽根村の他、小藪村や世利村の名が見える。そして絵図では、水田を二分するように、彦根山上の彦根寺へ向かう１条の巡礼街道が描かれる。彦根寺は、平安時代には観音の霊験場として都にまでよく知られていたようである。『扶桑略記』には、京都の貴族や庶民がこぞって彦根寺に参拝していることを伝え聞いた内大臣藤原師通が、寛治３年（1089）11月28日彦根寺に参詣して観音の霊験を得たと伝える。また『中右記』には、観音の霊験は今年限りという噂が流れたため、同年12月15日摂政藤原師実らが、さらに22日には当時院政をおこなっていた白河上皇が多くの伴をつれて参拝したと記す。写真の彦根古図の巡礼街道に「御幸道」の名があるのは、こうした事例に起因するものと考えられる。彦根寺の記録はその後途絶えるが、鎌倉時代に彦根寺の僧義光により施入されたと伝える百済寺の銅鑼と鈸子、室町時代に彦根寺に安置するため制作したと記す北野寺の役行者像が、その後の彦根寺のようすを断片的ながら伝えている。なお、今回の調査においても、彦根寺関連遺構・遺物の収集に努めたが、古代・中世期にまでさかのぼるであろうと予測される須恵質土器の細片を数点確認したにとどまった。



写２．井伊年譜　（彦根市立図書館蔵）
彦根城築城について、幕府からの普請奉行の派遣、７国12大名の動員、大工棟梁の名前、石工の担当場所、材料や石材の運搬などが記されている。

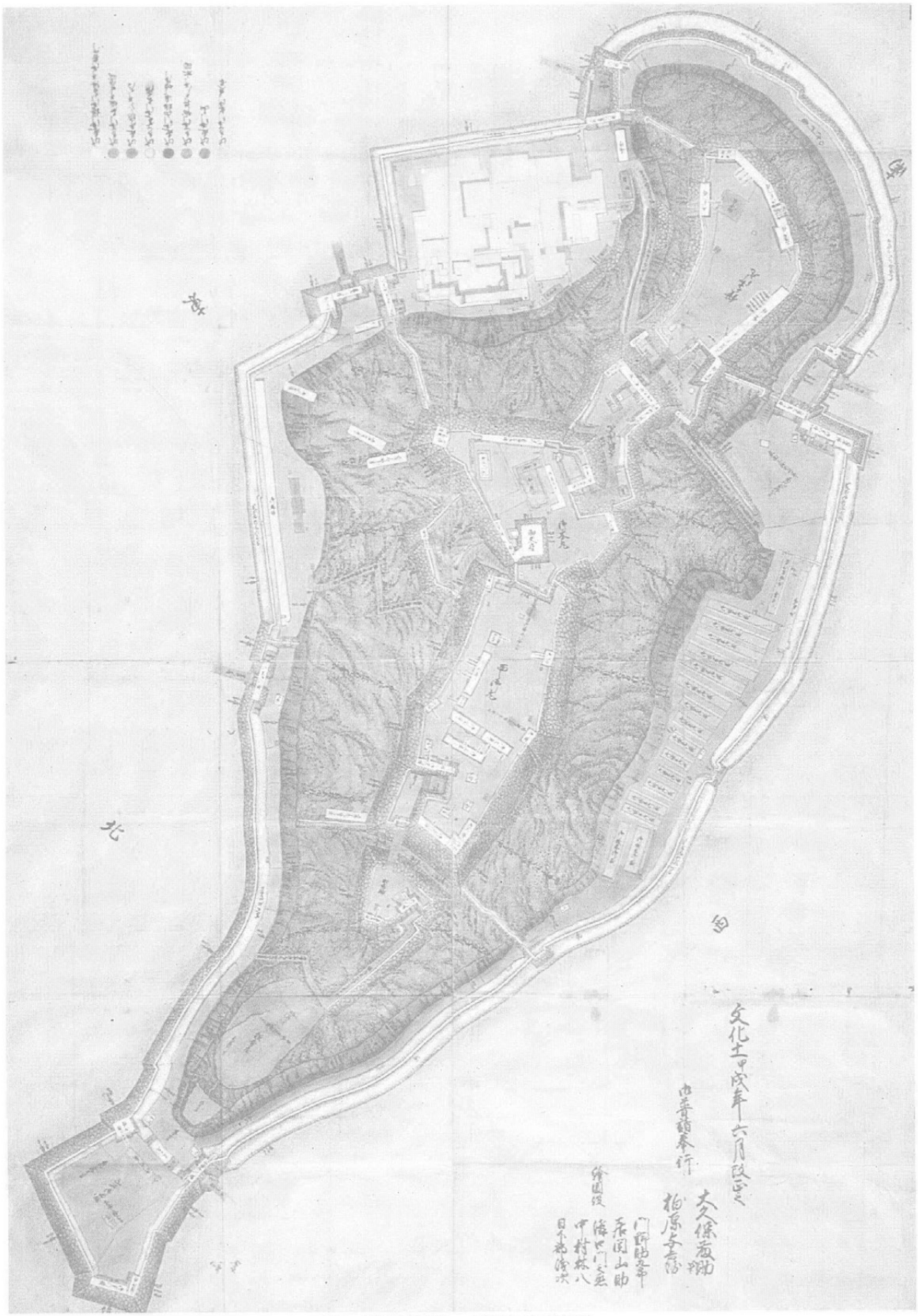
彦根城の築城

慶長５年（1600）９月　関ヵ原の戦は東国の勝利に終わり、同年10月　家康は徳川四天王の１人である井伊直政に、かつて西軍の雄将石田三成の居城であった佐和山城への就封を命じる。翌年、直政は焼損した城郭の一部を修復し、上野の高崎城から移り居城とする。しかし、佐和山城は中世以来の山城であり、鉄砲を主体とする新しい集団戦闘形態には不適である。加えて、この城はかつて石田三成の居城であり、人心を一新する必要があった。直政は城の移築を画策し、新たな築城地を磯山に求めようとするが、慶長７年(1602)、関ヵ原の戦いで受けた鉄砲疵が再発して死亡する。直政のあとを継いだ嫡子直継は、慶長８年（1603）老臣の木俣守勝に命じて幕府に佐和山、磯山、彦根山の各絵図を提出し、彦根山が築城に適した所であることを申し上げた。こうして幕府の許可を得て、慶長８年(1603)、いよいよ彦根山の城普請が槌音高く始まった。



写３．徳川秀忠書状
慶長８年（1603）、井伊直継のときに始まった彦根城築城は、幕府の手厚い援助により進められた。この書状は、二代将軍秀忠が城普請の最中にある直継に宛てたもの。築城のようすをうかがうとともに、炎天下での作業の労をねぎらっている。

城普請は、大阪冬の陣・夏の陣で一時中断しながらも、およそ20年後の元和８年（1622）頃までにほぼ全容が完成した。大阪両陣を境として前期・後期に二分すると、前期工事は、内堀によって囲まれた本丸・鐘の丸・西の丸などの主として城郭核心部が構築された。築城に際し、徳川幕府は３名の公儀御奉行を派遣した他、７国12の諸大名に助役を命じて、築城を急がせている。彦根は、江戸に幕府を構える徳川氏にとって、京都・大阪に対する戦略上重要な位置にあることが考慮されたのであろう。後期工事では、城まわりの門櫓・堀・石垣・高塀などの



写４．御城内御絵図　（彦根市立図書館蔵）

各施設、そして士族の邸宅などがおおよその完成をみた。後期工事は彦根藩独自で行われた。

築城にあたり、周辺の敏満寺・布施寺などの古寺、佐和山・長浜・安土・大津などの古城から、石や用材が集められたという。例えば天守の場合、井伊年譜に「天守は京極家の大津城の殿守也」とある。また、城内が見通せないようにとの配慮から、多くの樹木が植えられた。これらの樹木の多くは、軍用材としての利用を目的ともしたようである。

こうして完成した彦根城は彦根山の自然地形を利用して築かれた典型的な平山城であった。内堀に囲まれた郭内には、その山頂部に鐘ノ丸・天守のそびえる本丸・西ノ丸が南北に連なり、空堀をへだてて人質郭・山崎郭が付設されていた。又、山麓には、表門に面して本報告の表御殿が存在する他、西に米蔵、東に材木蔵などがあった。なお、絵図をみると本丸天守の前には御台所の付設された御広間があり、鐘ノ丸には御守殿がある。いずれも書院造りの大規模な建物が予想され、その性格および構築時期など、表御殿との関連で留意されるところである。

表１．彦根城郭・城下建設年表（『彦根市史』より）

年	代	
慶長 8	(1603)	彦根築城の計画始まる
同 9	(1604)	鐘の丸成る　町屋本町より割始む
同 11	(1606)	本丸天守成る　足軽中藪組屋敷設置
元和 3	(1617)	増足軽により川原町裏に８組（善利組）設置
同 8	(1622)	御城廻、石垣高塀諸門過半出来 松原口御門外橋出来 城郭及士民邸宅略成る
寛永 6	(1629)	増足軽により切通上下組、大雲寺組設置
同 13	(1636)	江戸町出来
同 18	(1641)	善利新町新立
同 19	(1642)	西中島埋立て士分邸とする
同 20	(1643)	西ヶ原築地被仰付
正保元年	(1644)	善利中町、大橋町、岡町、沼波町新立
同 2	(1645)	西ヶ原片町諸町北野寺裡門より馬場町の見付迄３区油屋町南側町屋の続より埋堀横町迄４区、江国寺隣より妙法寺裡前迄裏表の町６区、江戸町士屋敷等今年出来

一方、城普請とあわせて城下町の建設も急がれ、そのための大きな土木工事が行われた。芹川の付替え、尾末山の切崩し、松原四ツ川の掘削などである。芹川は、現在の河原町より長松院あたりで折れて、彦根山をかすめるように松原内湖へ注いでいたのを、西へ直流させて琵琶湖へ導く大工事であった。水害を防ぎ、『彦根古図』にも描かれていた数多くの渕や沼の排水を可能にした他、城下町南部を外敵から守るという防衛的な意義があったものと思われる。尾末山は、彦根山の山なみの東端、現在の尾末町あたりにあったとされる小山である。この一山を掘削し、その土砂が芹川の旧河道や周辺の渕・沼の埋め立てに活用された。松原は、内湖を抱えて琵琶湖沿いに細長く伸びる浜提である。ここに琵琶湖と内湖を結ぶ四条の川を掘削して舟運の利便を図り、あわせて内湖の排水対策とした。こうした大土木工事を経て、城下町もしだいに整えられていった。そして城普請がほぼ完成した元和８年頃までには、城下町もまた主要な町割がおよそ完成していたようである。『彦根古図』にみられたモノトーンな風景は、彦根城の築城と城下町の形成によって一変することになった。

表御殿の基本土層

城普請がほぼ完成した元和８年頃までには、表御殿も又、その姿を現在の地に表していたものと思われる。ところで、表御殿が造営される以前、当地はどのような環境にあったのだろう。博物館建設に先立ち実施したボーリング調査の結果、当地は急峻な彦根山に至る低湿地であったと考えられる。表御殿を建てるに際して、彦根山山麓を掘削し低湿地を埋めて平担な敷地を造るための、大規模な造成工事が行なわれた。従って、山側には岩床が露呈する一方、堀側には黄褐色を基調とし、角礫や粘質土で構成された山土が当地のベースをなす。以下、このベースをなす整地層を**整地層Ｉ**とする。整地層Ｉ上に造営された表御殿は、明治年間に解体されるに至るまで、

特に奥向の諸建物を中心に増・改築が幾度となく繰り返され、そのたびに部分的な整地が重ねられている。色調の差から5層（**整地層II 1～整地層II 5**）が識別される。ただこれらの整地層は、ある色調の土が、ある期間に一帯で使用されてその後使用されなかったという訳ではない。時と所をかえて再三使用されているのが実際である。従って各整地層が時期を画すメルクマールとはなり得ない。**整地層II 1**は黄褐色粘質土層である。全体にやや赤味を帯びているものの、色調が整地層Iに極似しているため見分けるのが困難であった箇所も多い。**整地層II 2**は赤褐色粘質土層。いわゆる赤土で、比較的粘性に富む。礎石配置後の化粧土として、建物の床下に薄く敷かれることが多い。**整地層II 3**は灰褐色粘質土層。この層も比較的粘性に富む。炭化物片を混入している場合も多い。屋外周辺で、この土に玉砂を混ぜて築き固め、貼り床にした例が各所にある。**整地層II 4**は黄灰褐色粘質土層。**整地層II 5**は淡黒褐色粘質土層。整地層II 3によく似た土層だが、やや黒色味が強く、炭化物片の混入も少ない。

明治年間の表御殿解体時にも、大規模な地均化が行われている(**整地層III**)。その際、廃材は焼かれて焼土と化し、突出する礎石の大半は抜かれてその一部が池泉や井戸、漆喰枡などの凹地にも投棄された。大正時代に公衆グランドに生まれ変わると、グランド用の土砂が入れられて、幾度か地均のための再整地が施されている（**整地層IV**)。

以上、当地の基本土層を略記した。調査時の遺構検出は、こうした土層をたよりに作業を進めたが、いずれも整地層であり、しかもそれが複雑にからみあっているために調査は困難を極めた。

表2．表御殿基本土層一覧表

I．**黄褐色粘質土層**　表御殿の造営に伴う整地層。

II．表御殿存続中の造改築に伴う整地層。

- II 1．**黄褐色粘質土層**
- II 2．**赤褐色粘質土層**
- II 3．**灰褐色粘質土層**
- II 4．**黄灰褐色粘質土層**
- II 5．**淡黒褐色粘質土層**

III．**黒褐色粘質土層**　表御殿解体時の整地層。

IV．**灰褐色砂質土層**　公衆グランド時のグランド用整地層。